
探偵のような

酒井 薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
探偵のような

【Nコード】
N3065Z

【作者名】
酒井 薫

【あらすじ】
ちよっとスカした青年が事件に巻き込まれて……。

依頼者

年末の小雨が降る朝のことだった。その女はアパートの外階段のそばに姿を現し、それからすぐに俺と目が合って、少し困惑した表情をみせた。

俺は用事を済ませて事務所を立ち去るところだったのだが、女の様子を見て、彼女から話しかけられるのを待った方がいいと直感的に判断した。

「あの……そちらの探偵事務所の方でしょうか？」緊張した様子を隠しきれずにその女は言った。

俺は当たっても外れても得しない勘だけはいつも鋭い。

「そうですか」

女の見た目はかなり若く、まだ十代の後半ぐらいで、自分と同世代のように思えた。黒いロングコートの裾から濃紺のスカートが覗く服装のせいなのか、年齢の割に地味な印象だった。もっとも、俺の服装もスカート以外は似たようなものだったが。

「相談したいことがあるんですが……」

彼女の消え入りそうにか細い言葉の語尾が、微かに震えたように聞こえた。その震えが寒さからくるものなのか、他の理由によるものなのかは分からなかった。

「調査の依頼ということですか。詳しい話は事務所の中で伺いましょう」

世間はクリスマススイブだからと訳もなく浮かれているようだったが、依頼を受けて浮かれる探偵などこの世に存在するのだろうか。彼女がサンタクロースからの少し早めの贈り物だとすると、サンタは届ける相手を間違えたことになるかもしれない。ここは俺の兄が経営する探偵事務所で、その兄は現在入院しており、俺は卒業の目処が立たない大学生にすぎなかった。

アパートの廊下では白い息と朝靄が邪魔をしてはつきりとはわからなかったのだが、斉藤郁と名乗る18歳の女子大生は、とても美しい顔立ちをしていた。最近流行りの大きな目と、薄い上唇が特に魅力的で、俺の好みのタイプでもあった。

「依頼の内容を伺う前に、言っておかなければならないことがあります」

「なんでしょうか？」彼女はそう言って、やや不審そうな顔で首を傾げた。

「実は、この探偵事務所の経営者は俺の兄で、俺は探偵ではありません。入院中の兄に頼まれてここを訪れた帰り際に、あなたに出会ったことになります。そういうわけで、法律上の問題もあるので、あなたの依頼を俺が引き受けるわけにはいかない。だから、兄の退院を待つて出直すか、他の探偵事務所を探してもらえないんです」

現在の状況と自分の立場を彼女に伝えたのだが、本心は言わなかった。

彼女は、多少の戸惑いと納得とが入り混じったような表情をして、俺の顔を見つめていた。ここで俺は、彼女が”かわいらしい”と、あらためて思ったのと同時に、自分の容姿にそこそこの自信があったことを思い出し、軽く微笑んでみせた。

「そうだったんですか。でも……そうですね、いきなり押し掛けで、申し訳ありませんでした」

彼女はそう言うと、ドアのほうへと歩きだした。

このまま彼女を見送るのが、この場合最も正しい対応だと思った。探偵事務所を訪れる若い女などにロクな奴はいないだろうし、明らかに彼女は、‘ワケあり’だと感じていた。しかし、どうやら世間だけでなく、自分にも少しは浮かれたところがあるらしい、そういうことにした。

俺は彼女の儂げな後ろ姿に向かって話しかけずにはいられなかった。

「斉藤さん」

彼女は足を止め、振り向いた。

「余計なお世話かもしれないけど、俺があなたの調査を手伝うことはできます。仕事としてではなく、あくまで個人的にということなら……」

「えっ、いいんですか？」

「兄の不在が理由で困っている人を、代わりに弟が助けようとしても、それほど異常なことではないでしょう」

好意については言えるわけがないのだった。それこそ、どこかに異常でもなければ。

「あなたにとっては迷惑なだけでも？」そう言って、彼女は薄く微笑んだようだった。おそらく、今日になって初めての笑顔なのだろう。

「それは構わないですよ、内容にもよるけど。――ではさっそく、依頼について話してもらえますか」

依頼

斉藤郁の話は以下のようなものだった。

彼女は同棲している12歳年上で建築作業員の恋人の様子が、一か月ほど前からおかしいと感じ始めた。浮気をしているのではないかと不安に駆られた彼女は、昨夜、我慢できずにととう彼氏を尾行してしまふ。彼女としては、浮気相手の存在が明らかになればその場で別れを決める覚悟の上だったらしい。しかし、彼女の予想は外れる。

家を出た直後からうなだれた様子がみてとれた彼氏は、繁華街の怪しげな路地裏へと向かい、そこで、見るからに怪しげなチンピラ風の男の二人組となにやら話しを始めた。それも、肩を小突かれたり足を蹴られたりしながらだそうだ。ヤバイことに巻き込まれているのは確実だろうから、彼女は警察に通報することを考えてみた。しかし、彼氏の側に落ち度がないとも限らないし、なによりも報復が恐ろしいためにその場では決断できなかったらしい。女が一人でどうにかできる状況ではないので、とりあえず自宅に戻ることにして彼の帰りを待った。彼は、彼女の帰宅から遅れること数時間後に無事戻ってきた。

彼女は一晚じっくり思い悩んだあげく、翌朝になり彼氏が出勤した後、自宅から最も近くにあったこの探偵事務所へ相談に行くことにした——今に至る経緯はそういう感じだそうだ。

俺は彼女の話の途中で、「ごめん、急用を思い出したんだ。依頼は他の探偵さんにあたってみてよ」というフレーズを、三回ほど言いたくなったのをどうにか抑えつつメモを取りながら最後までなんとか聴いた。

それで、肝心の依頼の内容だが——30の男がチンピラと揉めている事と、18の少女が年上の男と同棲する事。どちらがより危険

なことだろうかと思えてみた。答えは明らかだと思うのだが、それを今ここで彼女に指摘しても無駄なのだろう。

「彼氏から直接話を訊くわけにはいかないの？」

「危険な事に巻き込まれている場合、彼はきっと、私には本当のことを打ち明けてくれないだろうと思ったんです」

「なぜ？」予測できることではあったが、念のために尋ねた。

「私に危険が及ばないようにとか、男としてのプライドを守るためですよ。男の人が考えている優しさって、結果的には相手を傷つけることが多いじゃないですか。私のことをホントに大切に考えてくれているんだったら、つらい時こそ打ち明けてほしいのに……」

彼女の男性考察には一理あるのかもしれない。しかし、俺にとっではどうでもいいことだった。それにしても、どうやら依頼者の愚痴を穏やかに受け止めてみせることも探偵の業務に含まれているらしい。兄も大変なのだろうかと思し同情する。

「彼の身の安全が確保できればいいわけですよね」

彼女はそういうことです、と言いながら軽く俯いた。

俺は具体的な調査方法について考えてみた。しばらく考えてみても、頭に浮かんだのは尾行、聞き込みの二つだけだった。

この件について兄に報告するべきかどうかについても考えた。仮に兄が反対したとしても、俺はたぶん調査を続けるだろう。理由は自分でも上手く説明できないのだが、何となく嫌な予感がするからだろうか。兄に無駄な負担をかけるのも避けたかった。

「もう一度、彼氏を尾行しましょう。そうやって、掴んだ情報から対策を考えるしかない」

「わかりました」彼女は顔を上げ、真剣な表情と声で言った。愚痴を言った後の女が大体そうであるように、彼女は迷いを吹っ切ることができたのだろうか。女はめんどくさいものだったと思い出した。

尾行のチャンスができれば、俺の携帯に連絡してください。連絡を取り合いながら合流します。と俺が言うと、彼女は一つ頷き、お辞儀をして事務所を去った。

大きく腕を伸ばしながら何気なく窓の外を見ると、小雨は粉雪へと変わっていた。俺の彼女への好意も、発作的で熱を帯びたものから冷めたものへと変わっていた。

俺は、自分が久しぶりにワクワクしていることにここで気が付いた。

調査1

兄から頼まれていた用事——兄の代わりに事務手続きを役所で処理する——を済ませ、俺はファミレスで早めの夕食を摂っていた。

食事中、今日の新聞の朝刊、夕刊を確認したが、この街に何か所しかない繁華街での暴力事件に関する記事は見当たらず、スポーツとテレビ番組に関する、明日になれば何も覚えていないような情報だけを手に入れることになった。

新聞を畳んでいると携帯が震え始めた。予想していたよりも少し早かったけど、斉藤郁からの電話だった。

「今朝はありがとうございます」彼女の声は今朝よりも落ち着いていた。

「いえ、それで、彼が外出するんですか？」

「そうなんです。なぜか、今日は仕事を早めに抜けてきたらしくて、これから出かけると言っています。今はシャワーを浴びていて……」

俺は彼女の自宅と繁華街とのちょうど中間地点あたりに今から移動すると伝えた。

「斉藤さんいいですか、電話は繋いだままにしておいてください。彼の行き先が繁華街とは限らないし、不測の事態にすぐ連絡できるように」

「わかりました。それで、何か必要な物とかありますか？」

「デジカメと、ペンライトは俺のほうで二人分用意しています。身軽なほうがいいのであまり……まあ、なんて言うか、フル装備でガツガチみたいな感じは、やめたほうがいいですよ」

俺がこうゆうふざけたことを言うってことは、つまり、緊張しているからだ。

「わかってますよ。探偵さんも、面白いことを言うんですね」軽く笑った後で彼女は言った。

「面白くはないし、探偵の弟ですから。——それじゃ、そろそろ移

動しますね」

彼女は「はい」と言った後、すぐに電話を切ってしまった。彼女のルックスの印象から賢い女だと思い込んでいたのだが、裏切られたようだった。

俺は食べかけのハンバーグに別れを告げて、もう一度震え始めた携帯をいじりながら支払いを済ませて店を出た。

斉藤郁の恋人、中島英彦は、職業柄というべきなのか非常にガタイのいい男だった。距離があるためにはつきりしないが上下ともジャージ姿で、これから女に逢いに行くようには見えなかった。とくに周りを警戒する様子もないようなので、生まれて初めての尾行は斉藤郁の三メートルほど前を普通に歩くだけでよかった。

帰宅を急ぐ人々で騒々しい駅前を通過してすぐのことだった。

中島は有料のコインロッカーの前で立ち止まり、大型の荷物が収納可能な縦長のロッカーから、黒いアタッシュケースを取り出して足元に置いた。そしてポケットから取り出した煙草に火をつけ口にくわえて、次に携帯を操作し、耳にあて話し始めた。話しの内容は、仮に周囲の喧騒がなくても聞き取れなかっただろう。

あのアタッシュケースに見覚えはあるか、と携帯で斉藤郁に尋ねると、知らないです——との返事があった。中島が昨夜脅されていたという彼女の話を踏まえて考えると、あまり喜ばしい代物とは思えないアタッシュケースになるのだろう。俺は念のために、「斉藤さん、もしも身の危険を感じたら、その時はためらわずに逃げるようにしてください」と彼女に伝えておいた。

電話を終えた中島はタバコを投げ捨て、右手でアタッシュケースを掴み、先ほどまでよりも少しゆっくりと歩き始めた。しばらく進んだところで、俺の後方から不安げな表情で歩く斉藤郁が「今のところ、昨日と同じルートです」と教えてくれた。目的地も昨夜と同じなのだろうか。

コインロッカーから600メートルほど離れたところで繁華街に

入った。まだ日が暮れて間もないせいなのか若者が多く、猥雑な風情はあまり感じなかった。”街の浄化パトロール運動実施中”というたすきを付けた中年の男が、少年、少女の数人組に向かって「俺の街で地べたに座るな」と威張りちらしているのが目についた。いい歳をして身の程を知らない馬鹿オヤジでも人知れず街を支配できるものなのかと感心しつつ、にぎやかに歩く人々を避けながら中島の後姿を視界から外さないよう尾行を続け、居酒屋が四軒、ナイトクラブが二軒、そしてカラオケ店の前を過ぎたところで例の路地裏の場所が分かった。

そこは繁華街の北側に位置する出入り口の近くで、正面は大通りに面しており、大通りに向かって右手には地下へ向かうらしいエレベーターがあった。このエレベーターとその横に位置する雑多な感じが漂うテナントビルの中に、二人が横並びでギリギリ歩けるくらいのデットスペースがあるようだった。中島は周囲の視線を気にしながらさりげなくそこへ入って行った。

「ここですよ。昨日もここでした。この少し奥にちょっと広いスペースがあって、そこで今朝話したことが……」斉藤郁が小走りに俺のもとへ来て、息をはずませながら言った。

「ここからは俺一人で行くよ。斉藤さんからはくれぐれも電話で話しかけないようにね」

「わかってますよ。あ、もしかして、電話切っちゃったの皮肉ってます?」

今はそれどころじゃない、と言いながら路地裏の奥を窺い、俺は中に入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3065z/>

探偵のような

2011年12月13日00時50分発行